SUMMERJuly 2016 no.151

Japan Association of Environment Assessment



特集

「IAIA 16 名古屋大会」

会長就任あいさつ 梶谷修
副会長就任あいさつ 山本 芳幸・和田 仁志
新任役員の紹介
特集
IAIA16 名古屋大会の開催
JEAS展示ブース報告~ブース日記~ ············ &
セッション参加報告
トレーニングコース参加報告12
大会発表報告
アジア地域における環境影響評価に関する国際会議参加報告 …15
エッセイ
山岳写真家の現場から 山岳写真家 村田 一朗 16
平成28年度通常総会/懇親会
1/2.5万植生図をもとにした新たな植生自然度について20
環境アセスメント士紹介2
栗原 幹雄 (自然環境部門) / 城内 智行 (自然環境部門)
JEASレポート 22
JEAS資格·教育センター便り23
さ知らせ



第4回 JEAS フォトコンテスト入賞作品/「蔵王の夜」/撮影:高柳茂暢 (アジア航測 (株))



会長就任あいさつ

「未来を切り拓くアセスを目指して」

(一社) 日本環境アセスメント協会 会長 梶谷修



このたび、2016年度の通常総会におきまして、役 員改選が行われ、私は会長として再任されました。新 たな気持ちで皆さまとともに、協会発展のため最善の 努力をいたす決意でありますのでよろしくお願い申し 上げます。

当協会は、発足して 39 年目、一般社団法人移行後 5年目を迎えます。協会活動については、昨年度策定 しました、3ヵ年中期計画「JEAS 新中期計画 2018」 に基づき諸活動を推進し、重点主要施策を実施してま いります。

2005年度からスタートした協会認定資格制度「環 境アセスメント士」は大きな一歩を踏み出すことがで きました。2016年2月24日に、国土交通省の「公 共事業に関する調査及び設計等の品質確保に資する技 術者資格登録」に登録されました。調査・計画・設計 業務分野における「建設環境」施設分野での管理技術 者資格と認定され、今後、国土交通省や他省庁、自治 体の発注業務において、管理技術者として活躍の場が 大きく広がることが期待されます。試験委員会の先生 方をはじめ関係者の方々の長年にわたる努力に対しま して心より感謝を申し上げます。これを契機に環境ア セスメント士の一層の活躍の場を広げる活動を進めて まいります。

改正環境影響評価法が 2013 年 4 月に全面施行さ れ、風力発電事業等アセスの審査対象案件が急激な増 加傾向にあり、環境アセスメントを取り巻く情勢にも 変化がおきています。またパリ協定を受け、再生可能 エネルギー発電事業はさらに増加することが確実で す。環境アセスメントはこれらの事業が地域の環境と 共生を図りながら進めていくうえで、重要な役割を担 うことの認識が一層高まり、今では、更なる環境アセ スメントの迅速化、簡素化等、より効率的で効果的な 手法の導入等が求められています。協会としても、こ れらの課題に対応すべく、新たな制度・技術に向けた セミナー・研修及び調査研究等を引き続き推進してま いります。

「環境アセスメント士」がその専門技術者として位

置付けられている「環境リスク調査融資促進利子補給 事業」において、要件となっている環境影響調査につ いて、昨年度から協会内に助言委員会を設置しその運 営を担う業務を行っており、協会の新たな事業につい ての可能性が高くなっています。さらに温暖化対策や 災害リスク評価等事前の影響予測・評価等のアセスメ ント技術の重要度が一層増してくると考えられること から、環境リスク等環境アセスメント技術の適用領域 の拡大を進めてまいります。

環境アセスメントの国際的な動きとして、2016年 5月11日から14日に、国際影響評価学会 IAIA16の 世界大会が日本で初めて、名古屋で開催されました。 100 カ国、800 名以上の参加、500 件以上の発表等、 大変な盛り上がりでした。当協会も IAIA16 名古屋大 会の協力団体として、大会実行委員会での活動、ブー ス展示、研究発表等積極的に参加しました。環境アセ スメントに対して改めてその重要性が認知される契機 となり、特にアジア諸国の発展に向けたインフラ整備 や開発にともなって、環境社会配慮の制度的、技術的 なニーズを肌で感じることができました。協会として アセアン諸国等の交流についても検討を進めたいと思 います。

環境に対する市民意識の高まりと事業者の CSR の 推進もあり、環境アセスメントを取り巻く社会意識も 変化しています。制度にこだわらない自主アセスの増 加、海外事業における環境社会配慮を求める枠組みの 整備が促進され、グリーンファイナンスにおいても同 様な動きが進むものと期待しています。環境アセス メントは、国内外の計画・事業にともなう環境配慮等 を求める枠組みの中で重要かつ不可欠な社会システム であり、持続可能な社会を構築していく大きな役割を 担っていくものと考えられます。今後とも、協会は「新 中期計画 2018」に基づき、環境アセスメント領域の 拡大を積極的に図り、未来を切り拓く環境アセスメン トの実現を目指していく所存です。

引き続き、関係省庁をはじめ、会員の皆さま、関係 各位のご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

「副会長就任にあたって|

(一社) 日本環境アセスメント協会 副会長 山本 芳幸 東京パワーテクノロジー(株)

このたび、2016年度総会において副会長に再任されま したので、引き続きよろしくお願いいたします。

2015年度には『新中期計画 2018』を策定し、「会員メ リットの向上」、「活動領域の拡大」、「アセス士資格の有効 性向上」及び「諸活動の PR 強化」を活動の柱と定めました。 これらを大きく育て上げるのが今年度からの主な使命とな ります。今総会においてこの計画を報告し、会員の皆さま からご承認いただきましたので、7名の新理事の新たな発 想をお示しいただきながら推進してまいります。

また、昨今の環境アセスメントを取り巻く流れは、従来



までの開発行為に許可を得るための煩雑な事前手続から、 環境に配慮した開発は如何にあるべきかステークホルダー の皆さまと相談しながら計画を作り上げ、それが計画どお りに実現されたか報告することまで、と広範なものへ変化 してまいりました。折りしも、新たに「新中長期ビジョン」 を定めるための委員会を立ち上げますので、会員の皆さま からも積極的にご意見をいただき、設立39周年を迎える 当会の新たな出発点に恥じないものとしてまいります。

今後とも、会員各位、関係各省の方々には従前にも増し たご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

「JEAS の発展を目指して」

(一社) 日本環境アセスメント協会 副会長 和田 仁志 (株) 三菱地所設計

このたび、2016年度の通常総会で副会長を拝命し、微 力ではありますが協会発展のため尽力してまいりますの で、よろしくお願いします。

当協会は発足以来39年目となりますが、私はこれまで 理事を6年間勤め、広報部会情報委員会委員長、資格・ 教育センター長等を歴任してまいりました。その間多くの 方々と酒を酌み交わし親交を温め、絶大なご支援をいただ いてまいりました。まずもってこれまでの皆さまのご厚情 に感謝申し上げる次第です。ありがとうございました。

資格・教育センター長はこれまでどおり兼任してまいり ます。環境アセスメント士の資格制度は12年目を迎えま すが、本年2月に国土交通省の技術者資格登録がなされ たことで大きな転換点を迎えました。この機を捉え、より 社会に有用な資格として活性化してまいります。

また昨年度、2016年度からの3ヵ年を対象とした「新 中期計画 2018」を策定しました。この中では山本副会長 のあいさつにある4つの柱が掲げられ、「未来を切り拓く 環境アセスを目指して」さまざまなアクションプランが示 されており、これを確実に実行し JEAS の発展を目指して いく所存です。目標の実現に向けて山本副会長やほかの理 事の皆さまとともに、梶谷会長をしっかりと補佐してまい

今後とも関係各省はじめ、会員の皆さま方、関係各位の ご支援とご協力をお願いいたします。



役員氏名(会長・副会長を除き五十音順敬称略)

I.理事(23名)							
会長	梶谷	修	(一社)日本環境アセスメント協会		竹松伸一郎		(株)建設技術研究所
副会長	山本	芳幸	東京パワーテクノロジー(株)	(新任)	辻阪	吟子	(株)プレック研究所
副会長(新)	和田	仁志	(株)三菱地所設計		長岡	克郎	(株)東京久栄
(新任)	池田	和彦	(株)テクノ中部		新里	達也	(株)環境指標生物
(新任)	市川	克己	(株)オオバ		濱田	敏宏	パシフィックコンサルタンツ(株)
	加藤	辰彦	(一社)日本環境アセスメント協会	(新任)	林	邦能	(株)日建設計
	河合	徹	八千代エンジニヤリング(株)	(新任)	平野	一郎	(株)環境総合テクノス
	木村	明彦	(株)ドーコン		吉村	美毅	鹿島建設(株)
(新任)	工藤	俊哉	(株)ポリテック・エイディディ	(新任)	米山	佳伸	清水建設(株)
	黒崎	靖介	日本工営(株)	Ⅱ.監事(2名)			
	後藤	隆	三井共同建設コンサルタント(株)		髙塚	敏	(株)地域環境計画
	島田	克也	いであ(株)		所	英樹	(株)ところ会計事務所
	平良	辰二	(株)沖縄環境保全研究所	<名誉会長>			
	滝口	善博	アジア航測(株)		田畑日	出男	いであ(株)

新任役員の紹介



理事中部支部長

池田 和彦

(株) テクノ中部

このたび、弊社坂口の後任として中部支部長を仰せ つかり、大任に身の引き締まる思いです。

私は火力発電所や風力発電所の環境アセスメントに 長く関わってきました。今後、環境アセスメントを ともなう開発案件が大幅に増えるとは考えにくく、 だからこそ JEAS の多様な活動の重要性が増していま す。協会活動に不慣れなこともあり、ご迷惑をおか けすることもあろうかと思いますが、会員の皆さま のお役にたてるように努めてまいります。よろしく お願いいたします。



理事積算資料グループ委員長 市川 克己

(株) オオバ

このたび、理事を拝命するとともに、積算資料グルー プ委員長を務めさせていただくことになりました。 私はこれまで環境アセスメントと開発事業の両面で 業務に携わってまいりました。

環境アセスメントは計画・事業の合意形成における

重要な社会的システムであり、今後進められる広域 地方計画の取組には大きな役割を担っていくと考え ています。微力ではありますが精一杯努力してまい りますので皆様のご支援をよろしくお願いいたしま



理 事 資格制度委員会委員長 工藤 俊哉

(株) ポリテック・エイディディ

このたび、理事に選任され、資格制度委員会を担当 させていただくこととなりました。

私はこれまで、研究部会を皮切りに教育研修委員会 委員や資格制度委員会委員として活動してまいりま したが、社会における環境配慮へのニーズが多様化

しているなか、環境アセスメントの役割はさまざま な場面において、一層重要になってきていると実感 しております。このような時代に対応すべく、会員 の皆さまのお役に立てるよう努力してまいります。 宜しくお願いいたします。



理 事 研究部会運営委員会副委員長 辻阪 吟子

(株) プレック研究所

このたび、理事を拝命いたしました。環境影響評価 法が成立して19年。この頃私は愛知万博のアセス メント要領づくりに関わっていました。通商産業省 の担当や、ちょうど環境影響評価法の基本的事項や 技術指針を検討されていた環境庁職員の方々と、毎

夜毎夜議論を重ねたことが思い出されます。私は、 この春還暦を迎えました。まだまだ新しい知識も吸 収していくつもりですが、法制化にあたって目指し たものなど、アセスメントの本質を、これからも伝 えていきたいと思います。



理 事 情報委員会委員長

林邦能

(株) 日建設計

このたび、理事・情報委員会委員長を務めさせてい ただくことになりました。これまで私は教育研修委 員会に所属し、実務研修会や技術交流会の WG 等に 参画しておりました。近年の激動する社会情勢にお いて、JEAS としても状況の変化に柔軟に対応してい

5月の総会で関西支部長をさせていただくことにな

りました。電力系のアセス専門会社に入社して38年、

火力・水力・原子力の電源立地をはじめ、ゴルフ場、

工場立地、都市開発、最近では風力・バイオマス発 電など、いろいろなアセス業務に携わってきました。

く必要があり、環境アセスメントのプロフェッショ ナル集団として、社会に対して情報発信をしていく 重要性がますます高まっていると思います。皆さま とともに協会の発展に貢献してまいりたいと考えて おります。



理 事 関西支部長

平野 一郎

(株) 環境総合テクノス

この経験を活かし、関西支部、そして協会全体の発 展に少しでもお役に立てればと考えております。趣 味・嗜好はテニス、ゴルフ、読書、酒、タバコ(復活) …大概のことは許容範囲です。お気軽にお声かけく ださい。



理 事 セミナー委員会委員長 米山 佳伸

清水建設(株)

このたび、理事に選任され、研修部会セミナー委員長 を努めさせていただくこととなりました。 私は入社以来約30年、アセスメント業務に従事してま

いりました。また、2008年よりセミナー委員として活 動してまいりました。JEAS セミナーは会員の技術向上 といった会員サービスに加え、協会活動を対外的に示 す上で重要であると考えております。微力ではござい ますが、協会発展のために貢献したいと考えておりま すので、ご指導、ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上 げます。

JEAS NEWS SPECIAL ISSUE

「IAIA16名古屋大会」

本年5月、アセスメント分野で最も権威ある国際組織といわれる国際影響評価学会(International Association for Impact Assessment) の年次大会である IAIA16 が名古屋国際会議場で開催され、当協会からも海外交流グループ、中部 支部や研究部会が参加したほか、会員企業からも多数の参加があった。本号では、大会の事務局長を務められた東京工業 大学の村山教授にお話をうかがうとともに、大会の様子やそれに先駆けて実施されたトレーニングの様子を取材した。ま た、海外交流グループ・中部支部によるブース展示や、研究部会による研究発表についての報告を合わせて掲載する。

IAIA16 名古屋大会の開催

インタビュー:東京工業大学 環境・社会工学院 教授 村山武彦

1. はじめに

IAIA16名古屋大会は、プレイベントを含めた全体の会 期が5月8日(日)から14日(土)まで7日間に及ぶ 一大大会であった。その事務局長を務められた東京工業大 学の村山武彦教授に、閉会間もない5月20日、大会の概 要や舞台裏、成果や今後の展望等についてうかがった。

2. IAIA16とは

IAIA はどのような主体により構成される学会ですか。

周知のとおり、環境アセスメントはアメリカで 1969 年 に制度化されたところから始まった。それから10年ほど 経過して、欧米諸国を中心にある程度アセスメントの考 え方が定着しつつあった 1980 年に設立された国際学会が IAIAで、本部はアメリカのノースダコタ州にある。こう した背景を反映してのことと思うが、現在でもメンバーの 約3割は北米で、欧米、特に北米を中心とした学会となっ

Agriculture, Forestry, & Fisheries Indigenous Peoples Biodiversity & Ecology Oil, Gas, & Renewable Fuels Power Generation & Transmission Climate Change Corporate Stewardship & Risk Management Public Participation Cultural Heritage Social Impact Assessment Disasters & Conflicts Strategic Environmental Assessment Health

ていることは確 ■表-1 セクションミーティングのテーマ一覧

かである。 しかし、現在 では世界 120 カ 国からメンバー が集まり、これ までに世界各国 で大会を開催してきた。今大会でもアジアやアフリカから の参加者は多かった。国際学会と称しながら実態はほとん ど欧米諸国であるとか、大会は毎回アメリカ国内での開催 であるとかいう学会もあるなか、これは IAIA のひとつの 特色である。

IAIA には「環境」に該当する Environment が入って いませんが、扱う分野の範囲は広いのでしょうか。

制度化された環境アセスメントよりはずっと広い範囲を 取り扱う。開発にかかわらず、あらゆる問題における影響 の評価を取り扱っている。環境アセスメントが中心ではあ るが、事業レベルのアセスメントから、SEA のような計画 段階の事案、さまざまな問題における影響の評価という意 味では、ほぼあらゆるものが対象になっているといえる。

12日(木)の夕刻には13のテーマでセクションミー ティングが開催されたが、これらは IAIA に常設されてい る分科会のようなもので、基幹的なフィールドといえる(表 - 1)。わが国ではなじみのない先住民族の問題等もある。



インタビューの様子(左側:村山教授)

日本のアセス学会でも、英名では Environment がないのは、 IAIA を意識してのことだろう。

今回、日本で開催されるに至った背景をお聞かせください。

アジアではこれまでも 1993 年に上海、2000 年に香港、 2007年にソウルで、それぞれ開催された実績がある。日 本もいずれ、という話は以前から国内外であったのだが、 3年前、IAIA の会長も務められた原科幸彦教授(千葉商 科大学)が、アセスメント分野では最も権威あるといわれ るローズ・ハーマン賞を受賞されたのを契機にその気運が 高まった。以前から日本での開催が期待されていたことも あり、当初6都市の候補からいくつかの条件を考慮して名 古屋での開催に至った。

今大会のテーマである「レジリエンスと持続可能性」もそ の頃に決まったのでしょうか。

テーマは早い段階、3年前の秋には固まっていた。「レ ジリエンス」という語は耳慣れない方もあったかもしれな いが、生態系の分野では以前から使われているキーワード である。震災やそれにともなう事故のことがあって、時節 を反映するひとつのキーワードだという感覚があった。

3. 大会の様子

事務局として苦労された点はありましたか。

準備委員会は3年前から始まっていた。大会の事務局は、 特定の団体が主体となったというより、個々のメンバーの 尽力で成り立っていた。IAIA 日本委員会は実行委員会と 3つのサブ委員会から構成され、メンバーは60名程度で あった。

海外からの参加者のビザ取得支援やスポンサーとの協 議、発表の審査や振り分け、ベジタリアン向けの弁当の中 身や数の調整まで、事務局の仕事は多岐にわたった。

ただ、アメリカの IAIA 本部には専属のスタッフがいて、 分担してくれる部分もあった。また会場運営やレセプショ ン等は、愛知・名古屋のメンバーの尽力でスムーズに運営 された。大会中、参加者から本部にほとんどクレームがな

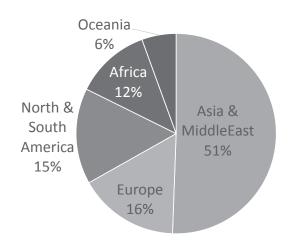
かったため、逆に心配されたと聞いている。セッション の運営は座長に任せる部分が多く、セッションの計画や提 案も、出てきた発表の整理も座長が行う。ただし、ルール どおりに準備してくれる方ばかりでなかったのも事実であ

参加してみた印象で、アジアからの参加者が多かったよう に感じました。

参加者数は、概数で800名程度であった。地域別にみ ると、最も多いのがアジア・中東で51%、次いでヨーロッ パ、南北アメリカ、アフリカとなっている(図-1)。ア ジアの内訳を細かく見ていくと、協会の協力もあって、日 本が約170名と最も多く、次いで中国が約60名、その後、 タイ、韓国が20数名、フィリピン、ベトナムが10数名、 そしてカンボジア、ミャンマーと続く。前日に環境省が「ア ジア地域における環境影響評価に関する国際会議」を実施 したので、その流れで参加した方もあったが、今大会だけ のために来日した方もいた。

このように、アジアからの参加者が非常に多かったこと が今大会の特色の一つであるといえる。その要因としてア ジアの一員としての日本で開催されたことも大きいが、そ れだけではなく、時代の流れもあるだろう。

■図-1 参加者の地域別内訳



村山 武彦

福島大学助教授、早稲田大学教授を経て現職。 環境計画・政策等の研究に取り組むかたわら、 国際協力機構の環境社会配慮助言委員会委員 長、環境アセスメント学会副会長、リスク研究 学会事務局長などを務める。2015年1月から IAIA 日本支部の事務局長。

特に議論が活発だったテーマはありますか。

セッションの数でいうと、一番多かったのは、やはりア ジアに関するものだ。これまでもアジア関連のセッション は毎回あったが、今回は特に多かった。その次が災害関係 で、震災や異常気象といった自然災害だけでなく、原油流 出事故など、人為的な災害を取り上げたものも多かった。 この分野には世界銀行など資源開発を手がけている人たち が集まっている。その次が生物多様性や生態系関係、次い で国際協力となっている(表-2)。

■表-2 テーマ別のセッション数

	Biodiversity and Ecosystem	13
	Collaboration in Asia	18
	Collaboration in Asia	
	Emerging Issues on Resilience & Sustainability	
Conference Theme	Environmental Info Infra	
Conference meme	International Cooperation	
	Man-made & Natural Disasters	
	Population Change	
	Transportaion & Landuse	5
	Corporate Stewardship & Risk Management	5
	Cultural Heritage	4
	Energy	4
Canaral Tanina	Health	2
General Topics	Public Participation	
	Indigeneous Peoples	1
	Social Impact Assessemt	3
	SEA	11

学術研究というより事例紹介のようなものが多かったとい う印象があります。

IAIA の大きな特色のひとつとして、実務者が多いこと が挙げられる。会員の内訳をみると、コンサルタントが約 40%、大学関係者が約20%となっていて、それに行政関 係者、銀行、NGO等が続く。このため、関わった事例の 紹介等を通じて情報共有や交流を目的としているメンバー が多い。国際的に活躍しているコンサルタントには、さま ざまな事例紹介は参考になると聞いているし、また大学関 係者も、研究発表の場は別に確保しつつ、IAIA ではネッ トワークづくりを主目的と考えている場合もある。

このような性格の組織であるため、発表の内容をみて学 術性や新規性などの点から厳選するといったことはしてい ない。応募は500件近くあったが、リジェクトしたのは 10件もない。基本的にはいずれかのセッションに振り分 けている。IAIA にはそのような対応が許される雰囲気が ある。

IAIA の最初の A は Association である。和訳の「学会」 というのは、実務者からすると敷居が高く感じられるかも しれない。しかし、開発銀行や政府関係のメンバーもいる ことを踏まえると、むしろ「協議会」という性格が強い。

今回日本で開催した成果はどのように考えられますか。

個々の参加者にどれほど成果があったかについては、今 後本部がアンケート等を実施して把握していく予定になっ ている。個別に耳にする話では、実務者の方々はネットワー クづくりやビジネスチャンスの探索で、それなりに成果が あったと聞いている。

また、今回セッションの多かったアジア関係では、国際 協力が大きなテーマとなった。アジアデイフォーラムでは 最終的なアウトプットとして合意文書が取り交わされた。 世界銀行と ADB (アジア開発銀行)、JICA (国際協力機構) が協働しつつ環境社会配慮を推進していこうというもの だ。これらの機関の間で、さまざまな事業における環境社 会配慮について情報の共有と協力を行うという枠組みがで きたことは、大きな成果として挙げられる。

4. おわりに

国際的な舞台で、当協会に期待される役割がありますか。

IAIA は実務者が多数派の団体であり、実務者にとって の活動の場のポテンシャルは高い。各国の実務者同士の国 際的な交流や連携が深まることが、IAIAの発展に繋がる と思われる。そうした動きを、アジアの他の国が中心となっ て始める前に、わが国から実務者を中心にネットワークづ くりの機運が高まることを期待したい。

(編集委員:加藤賢次/合田賀彦/高木圭子/細川岳洋)

IAIA16 JEAS 展示ブース報告 ~ブース日記~

当協会は、IAIA16名古屋大会において、ブース展示者 として参加し、展示ブースにおいて、以下に示すポスター 展示及び活動内容資料の配布を実施するなど、広く国内外 へ協会活動内容の広報を行った。

ポスター	①常磐線復旧事業特定環境影響評価
	②女川町中心部の土地区画整理事業に係る自主アセス
	③取手市における除染事業(道路走行サーベイ)
	④生物多様性オフセットの導入に係る研究(研究部会)
	⑤自主アセス実施ガイドブック(研究部会)
	⑥環境リスク調査融資促進利子補給事業
	① JEAS 認定資格制度
配布	協会パンフレット
	環境新聞「環境アセスメントの展望」(平成 27 年 11 月 18 日)

来客者への英語説明は、協会中部支部の協力を得て、以 下4名が実施し、海外交流Gの古松、玉木、瀬口、松永 の4委員も展示内容の説明サポートを行った。

日程	名前	所属
5/11 (水)	橋本友希	いであ(株) 海外事業部
5/12 (木)	大木俊亮	日本工営(株) 名古屋支店
5/13 (金)	陸田径典	(株)テクノ中部 環境調査部
5/14 (土)	寅丸武司	(株)テクノ中部 環境調査部

1. 展示ブース日記

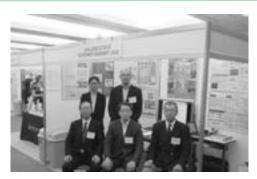
各日の状況を、説明者のコメントを中心に、海外交流G メンバーのコメントを交え「展示ブース日記」と称して紹 介する。

【5/11(水)初日】開催初日、梶谷会長、栗本顧問を囲 み記念撮影もつかの間、JEAS のブースにはさまざまな国 の参加者の訪問があり盛況となる。来訪者はアフリカ諸国 とアジア地域からの参加者が多く、所属は大学、民間環境 コンサルタント、政府機関と多様であった。多くは協会の 活動に高い関心を持たれ、まずは、「公的機関なのか否か」、 「外国企業の入会方法」、「インターンシップ等の受入れの 有無(インドからの参加者、日本の大学院生)」、「開催セ ミナーの内容や英語での開催の有無」等、協会の事業内容、 海外交流に向けた情報発信・研修実施等に関わる質問が寄 せられた。また、日本の環境アセスメント制度と環境アセ スメント士に関する質問も多く、自国の環境アセスメント 制度との比較研究(社会配慮の有無)に関わる質問(香港 からの参加者)や、自国でも環境アセスメントの資格の公 的認定制度がスタートし、JEAS の環境アセスメント士認 定資格制度に強い関心を示された方から、業務受注におけ る資格の必要性、CPDの管理・認定資格制度についての 質問(南アフリカからの参加者)を受けた。初日で40部 の協会パンフレットを配布し、総勢で50名を超える来訪 者を数えるなか、15名程度の方々に直接説明を行った。 JEAS の活動、日本の環境アセスメント制度について十分 にご理解いただけたと思う。

一方、この IAIA 大会を新情報・人脈獲得、人材発掘の 場とされている方もいた。アジア開発銀行(中国事務所) からの参加者は、環境管理計画(EMP)に関わる人材を 探され、海外コンサルタントの方々はプロジェクトに応じ た専門家スタッフを探す。彼らは、時代とともに変化する 環境のテーマに対応した専門家を獲得したほうが経営上有 利と明言され、IAIA への参加目的意識をはっきりと持っ ている。 (橋本、古松委員)

【5/12 (木) 2日目】ブース来客数は減ったものの、来 訪されている方々の多様性には驚かされる。中国、ミャン マー(政府の方)、ナイジェリア、アメリカ(元米国環境 保護庁所属の方)等の国からの来客に対応する。

環境アセスメント士認定資格制度に対しては非常に関心 が高く、特に受験資格・CPD 制度についての質問が多かっ た。ナイジェリアの方からは環境アセスメント士の業務に ついて、活躍の場に関する質問があり、米国環境保護庁の 元職員の女性は、資格制度のポスターを見ながら、「アセ ス業務の品質確保の課題は、自分たちも同様に考えた。こ



大会初日

の資格は ISO などよりよほど難しそう」と感想を述べら れた。来訪者は多様だが、テーマは各国共通であると感じ る。

JEAS のブース前には、本大会の主催者である IAIA Japan のブースが設置されていたため、ニュージーランド 及び中国からの参加者から IAIA Japan と JEAS の関係・連 携(相互会員資格等)に関わる質問があった。今回、海 外の多くの方が認定資格制度に注目されており、今後も IAIA 等の国際会議をはじめとする海外交流活動を行うこ とは、環境アセスメントに関わる資格制度の海外での普及 に寄与するものと考える。 (大木、玉木委員)

【5/13 (金) 3日目】ボストンから来日の Fisher 氏 (NGO) 団体所属)が訪問。「"CERES"という組織をご存知かな」 という問いかけを端緒に、「企業活動における自主的環境 アセスメントガイドブック | のポスターを指して、「CERES | のプロセスによく似ていることを指摘された。「CERES」は、 アセスに限らずさまざまな取組の格付けを行う機関である とご教授いただいた。確かに、格付けすることで社会貢献 している企業の取組が誘発されることが考えられる。自主 アセスに関しては世界的に見ても類似のアプローチが採用 される傾向が強く、業界団体によるデファクト化(業界標 準化)が進んでいるという印象を受けた。(陸田、玉木委員)

東日本大震災復興事業のアセスは、特別措置法による手 続きの簡易化・迅速化に則り進められているが、タイの参 加者から、日本政府の柔軟かつ迅速な対応に高い評価を得 た。また、日本の森林総研の参加者からは、国際連携にお ける気候変動対策と環境アセスメントの関係性に関する アドバイスもいただいた。これは COP21 において REDD+ が正式にその枠組みとして認められた一方で、温室効果ガ スの森林吸収促進を目指す手法が、生物多様性に影響を及 ぼすことが懸念されるというものであった。今後もより広 く、分野横断的な配慮に基づき、環境問題に取り組む必要 性を強く実感した。

【5/14(土) 最終日】最終日となりブース訪問者は疎ら



来訪者で賑わうブース

であったが、行き交う方々に積極的に声掛けを実施する。 配布物を収集されていた香港からの参加者(NGO団体所 属)が、生物多様性オフセットの導入研究に関するポスター に注目されていた。日本でも生物多様性オフセットの制度 化に向けさまざまな課題検討がなされているが、香港の生 物多様性オフセットの動向について尋ねたところ、香港は 国土が狭くオフセットする場所の確保が難しいこと、小さ な島は多くあるが、生息環境としては比較的均一で、生態 系の多様性が乏しいことが問題と説明を受ける。日本には オフセットできるだけの国土があり、多様な生態系が存在 していることをあらためて気付かせてくれた。

また、午前中の発表セッションにて、研究部会の土門氏 が、「日本での民間事業における自主アセスの提案」を発 表された。この発表に興味を持たれたカナダのウィニペグ 大学の Diduck 教授が JEAS ブースを訪問され、「自主アセ ス実施ガイドブック」、「環境リスク調査融資促進利子補 給事業 | 及び「JEAS 認定資格制度 | のポスターに注目し、 企業連合である協会が、このような研究活動、事業活動を 行うことは非常に興味深いと熱弁された。これには梶谷会 長、土門氏はじめ、ブース一同が大満足の"ひとコマ"で あった。 (松永)

2. JEAS の今後の海外交流活動に向けて

IAIAO7 ソウルに続き、2回目の参加となる海外交流グ ループの瀬口委員は、今回、協会・学会活動を通じて知り 合った元韓国環境政策院(KEI)研究員の Jung 氏(現在、 忠南研究院環境生態研究部の主任研究員)と数年ぶりに再 会した。Jung氏は、現在ベトナムのハノイにおいて環境 に関する国際協力に携わっておられ、瀬口委員は協会の海 外交流の展開上大いに参考になる情報であると語る。海外 交流とは「海外に向けた広報や交流に関する活動」である ことを、IAIA16名古屋にて改めて認識した。JEASの今後 の海外交流活動のあり方、あるべき姿がはっきりと見えて (海外交流グループ:松永忠久) きた。

IAIA16 セッション参加報告

所:名古屋国際会議場

日 時:2016年5月11日~14日 参加者:約800名(事前登録 約750名)



会場の名古屋国際会議場

1. はじめに

JEAS ニュース編集委員として本大会に参加する機会を いただいたので、セッションでの発表内容を中心に、その 概況を報告する。

2. 会議内容

大会は、3.5 日間にわたるテーマ別セッションで構成さ れており、同時通訳等はなく、すべて英語で行われるため、 ある程度の英語力があることを前提に進められる。

(1) 開会会議 (オープニング)

開会前には、「琴」の生演奏による和の音色が会場内に 流れ、各国からの参加者を出迎えた。

会場には各国から約800名が集まりオープニングセレ モニーが始まった。原科大会実行委員長(千葉商科大学教 授)、村山大会事務局長(東京工業大学教授)の開会挨拶 からはじまり、大村愛知県知事、河村名古屋市長等から 歓迎の挨拶、IAIA チェアマン、武内和彦東京大学名誉教 授等の挨拶、講演が行われた。河村市長は、「日本で一番 給料の安い市長です」との自己紹介から始まり、「日本で No.1 の都市は東京ではなく適応力と持続可能性のある都 市名古屋! 名古屋を大いに楽しんでください」と英語で の熱いスピーチで参加者のハートをつかみ、大いに会場を わかせた。

(2) テーマ別セッション

テクニカルプログラムは、テーマ別セッションに分かれ ており、各セッションは1時間30分単位で行われ、各自、 興味あるプログラムに参加する。環境に関するものだけで なく、交通輸送、災害、健康、文化等の影響評価も多く発 表された。参加したセッションで、特に印象に残ったプロ グラムの内容を以下に示す。

■「持続可能な交通輸送」

本セッションはトヨタ自動車が後援しており、バンコク

市内の交通渋滞解消に向けた企業、政府、市民の協力によ る社会実験の取り組みについて、トヨタ自動車の社員から 発表があった。バンコクでは、都市の急成長により、都心 部に交通が集中し、通勤・通学の時間帯は激しい交通渋滞 に見舞われている。特に学校への親のマイカーによる送迎 が全生徒数の70%程度を占め、渋滞をさらにひどくして いる。発表の冒頭で、渋滞を避けるため午前4時30分に バス停に立つ子供の写真が印象に残った。対策としては、 日本と同様に鉄道利用によるパークアンドライド、マイ カーによる送迎を禁止しスクールバスの導入、政府による 広報・啓発活動があげられた。これらの交通渋滞解消に自 動車メーカーのトヨタ自動車が協力し、都心部の渋滞と環 境改善、ひいては郊外での車の利用を促し、都市と環境と 企業の持続的な成長を目指している。また、その後のセッ ションでは、スマートシティに向けた影響評価が議論され、 オーストリアにおける公共自転車の利用、シンガポールに おけるスマートシティ事例等も紹介され、発表者からは、 「スマートシティとは、住んでいる人々が幸せな生活を送 れる街」であることが重要であると述べていた。

■「新しいコミュニケーション手法」

本セッションでは、各国からアセスにおけるコミュニ ケーション手法が発表された。アセスでの住民の関心事項 や、アセス図書公表後の意見数の推移、分かりやすいアセ ス図書などが紹介された。早い段階での住民関与が有効、 アセス図書は分厚くなり分かりにくいなど、いずれもわが 国が抱えている同様の課題に各国が取り組んでいることが 分かった。

アイスランドの電力会社が行った風力発電所のアセス事 例紹介では、当該事業のウェブページ上で複数案を示し、 各案について眺望点からの動的なフォトモンタージュが見 られたり、フォトモンタージュ上の縦線を左右にスライド させると風車が見えたり消えたりするなど分かりやすい事 例であった(http://burfellwindfarm.landsvirkjun.com/)。



セッションの様子

■「レジリエントな計画、プログラム、プロジェクトへの SEA 及び EIA の寄与 |

本セッションでは、「EIA はレジリエントなプロセスか?」 「イギリスの SEA はレジリエントではない」等、レジリエ ンスと影響評価の関係等を整理した発表に加えて、大西洋 に浮かぶ孤島、セントヘレナ島での空港建設に係る環境影 響評価事例が紹介された。セントヘレナ島はナポレオン1 世の流刑地として有名であるが、孤島であるがゆえに、衛 星の携帯電話しか使用できない、南アフリカのケープタウ ンからの船便が3週間に1度しか来ない等の悪条件のな か、イギリス政府からは廃棄物を持ち帰ることが求められ るなど、特異な条件下でのアセス事例が発表された。

(3) 展示ブース、ポスターセッション

展示ブースには、名古屋市、国土交通省中部地方整備局、 IAIA 日本支部、中部大学、日本開発銀行、JEAS、民間の 開発コンサルタント、環境コンサルタントや科学雑誌で世 界的に有名なテイラー&フランシス社等の企業や団体か らの展示があった。

また、ポスターセッションの時間には多くの参加者が訪 れ、情報交換がなされていた。なかでもポルトガルの環境 コンサルタント会社「STRIX」からは、風力発電によるバー ド及びバットストライク対策としてのレーザー感知器が紹 介され、多くの参加者が興味を示していた。話を聴いてみ ると、検知した鳥類が近づいてくると、ブレードの回転速 度を落とし衝突を避けるシステムがあるとのこと。風車か ら 3km 離れた場所で 5cm 程度の飛翔個体を確認できる精 度をもつという。

(4) ランチタイム、コーヒーブレイク

ランチタイムには弁当が配られた。弁当の種類は日本食、 洋食、ベジタリアンと複数用意され、国際大会ならではの 配慮がなされていた。また、コーヒーブレイクは各セッショ ン間に30分とたっぷりとられており、コーヒーと菓子を



コーヒーブレイクの様子

自由にとり、セッション後の重要な情報交換の場となって いた。余談ではあるが、弁当では日本食が、菓子は抹茶味 のチョコレートが人気とのことであった。

(5) 閉会会議

閉会会議では、大会中の成果などについての村山事務局 長からの発表に続き、次回開催地であるカナダ国モントリ オール市を紹介する映像が流れるなど、華やかな雰囲気の なかで進められた。このようななか、閉会会議の締めのス ピーチに立った原科実行委員長は、参加者に歌を教えると 言って「すいかの名産地」を歌いだし、そのバイタリティ には驚かされた。

3. おわりに (雑感)

村山事務局長のインタビューにもあるように、IAIA は 国内の学会のような堅苦しい雰囲気はなく、コンサルタン トや政府関係者、有識者などの参加者が情報や意見交換の 場として広く活用していると感じた。発表のなかには、ア セスメントが本当に必要なのか? など逆説的・刺激的な テーマを掲げて意見を交わすなど、国際的な会合ならでは の雰囲気を楽しむことができた。各国のアセス事例に興味 を持つ自分に気づくと同時に、他国の方も日本のアセスの さまざまな課題にも興味を持つのではと思った次第であ る。機会があれば、また参加したい。

(編集委員:加藤賢次/細川岳洋)



閉会会議、IAIA 日本事務局の方々

IAIA16トレーニングコース参加報告

Integrating Ecosystem Services into Development Planning A Training for Impact Assessment Practitioners

開発計画段階での生態系サービスへの影響の配慮ー影響評価実施者への研修

1. はじめに

IAIA16の本プログラムが始まる前日の5月9日(月)、 10日(火)に、以下の4つのトレーニングコースが開講 された。

- Integrating Ecosystem Services into Development Planning(開発計画段階での生態系サービスへの影響 の配慮)
- How to Maximize the Value and Effect of Social Impact Assessment (社会影響アセスメントの価値と効果の最 大化)
- Quality Assurance in EIA: Guide and Review (環境影 響アセスメントの品質向上:作成手順と審査)
- State of the Art Sustainability Assessment (持続可能性 アセスメントの現状と今後)

※執筆者による仮訳

そのうち、「Integrating Ecosystem Services into Development Planning」のトレーニングコースの概要を以下に 報告する。

2. 本トレーニングコース開催の背景

生態系サービス(Ecosystem Services)とは

生態系サービスとは、2005年に発行された「Millennium Ecosystem Assessment Report」により広く周知された概 念であり、「私たち人間が生態系から得ている恩恵」と定 義される。①生態系は、食糧や燃料等の生活に必要な資源 を供給し、②洪水制御や水の浄化等、環境の機能を調整し、 ③精神的な癒しやレクリエーションの機会を提供してくれ るだけでなく、④生態系自体が①~③を維持してくれると いう、4つのサービスを人間に提供しているのである。

背景

生物多様性の保全は持続可能な開発のために不可欠とい う認識は生物学者の間では共通となっているが、生物多様 性の保全は開発推進の障壁となりうるもの、コストがかか

るものとして、開発計画には十分に組み込まれてこなかっ た。しかし、生物多様性を「生態系サービス」という概念 に置き換えることで、事業による自然環境への影響を社会 環境への影響として認識できるため、開発推進者にとって、 配慮しなければならない影響として比較的理解・納得され やすくなる。このような考えから、開発計画や環境アセス メントのなかで生態系サービスへの影響を配慮する大きな 意義が見出された。

また、近年では、国際金融公社 (IFC) 等の国際的な融 資機関でも、開発プロジェクトの計画時に生態系サービス について配慮することを要求するようになってきている。

本トレーニングコースは、このような背景を踏まえ、開 発計画や環境アセスメントのなかで、生態系サービスへの 影響を配慮するための実践的な手法を理解・体験するため のコースであった。

3. 講師及び受講者

本コースには、講師としてドイツ国際金融公社(GIZ) のアドバイザーである Ulrike Tröger 氏、フリーランスコ ンサルタントの Isabel Renner 氏が招かれた。

また、アジア(インド、フィリピン等)、アフリカ(モ ザンビーク、ガーナ、ケニア等)、欧米(米国、カナダ) から、20名の受講者が集まった。国際/政府機関、研究者、 コンサルタント等のさまざまなバックグラウンドを持つ受 講者が集まり、幅広い視点から活発な議論が行われた。



トレーニングコースの参加者

Step 2 Step 5 Step 6 Step 1 Step 3 Step 4 Defining Screenthe scope of ecosystem service ing better ing and assessment and and trade-offs making setting the stage ecosystem

■図-1 開発計画で生態系サービスに配慮するための 6 ステップ

4. 本トレーニングコースの内容

開発計画で生態系サービスに配慮するための6ステップ

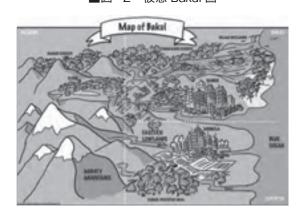
実際に生態系サービスという概念をどのように開発計画 に反映させればよいのか。本コースでは、6ステップによ る検討手法が紹介された(図-1)。

ワークショップ「仮想 Bakul 国の開発計画」

上記の6ステップを体験し、本手法を実践的に理解す るため、本コースでは、洪水被害や都市化、少数民族の存 在等のさまざまな問題を抱える仮想「Bakul 国 Indare 県」 (図-2)において、バイオ燃料生産促進、エコツーリズ ムの展開、カカオ生産の質向上等、複数の開発事業案から 成る計画について検討するワークショップを中心に進めら れた。

ステップ1として、Bakul国に存在する生態系サービス をイラスト地図を見ながら受講者でブレインストーミング し、ステップ2として、各開発事業案を実施した際に影響 (impact)を受けうる生態系、開発により依存(dependency) される生態系の特定、重要なものの優先順位づけについて 議論した。そのうえで、ステップ3では、重要な生態系 サービスの現状、今後の生態系サービスの増減傾向、変化 の要因、関連するステークホルダーを特定し、ステップ4 で受講者は想定されるステークホルダーになりきり、開発

■図-2 仮想 Bakul 国



案に対する意見を主張するロールプレーを行った。ロール プレーでは、ステークホルダーが開発事業から各々の利益 を獲得しようとお互いの言い分を譲らない討論が繰り広げ られ、ステークホルダー間の議論の収拾の難しさを改めて 実感した。最後に、ステップ5及び6として、生態系サー ビスへの影響を低減し、かつ各ステークホルダーの意見を できる限り反映するためには、どのように開発案を修正す べきか、を議論した。

5. おわりに

さまざまなバックグラウンドを持つ受講者と議論するこ とで、新たな視点や気づき、知見を得られる貴重な研修の 場であった。

本コースで紹介された生態系サービスに配慮するための 手法は、開発計画や空間計画等の上位計画で特に有効であ ると感じられた。加えて、プロジェクトレベルの環境アセ スメントにおいても、代替案の検討やスコーピング段階に おいて、生態系サービスについて考慮することで、より包 括的で、ステークホルダーの意見を取り入れた強固なアセ スメントにすることができるのではないか、と感じられた。 より詳細な手法の説明については、オンライン上で公開さ れている GIZ のレポート「Integrating Ecosystem Services into Development Planning」を参照されたい。

(編集委員:北川瑞己)



ワークショップの様子

IAIA16大会発表報告

JEAS 研究部会では、口頭発表セッションにおいて研究成果 2 題の発表を行った。1 題は自然環境影響評価技法研究会における生物多様性オフセット評価のケーススタディ事例の発表、もう1 題は新領域研究会環境配慮ワーキンググループ (WG) における企業活動に資する自主的環境アセスメントの進め方の研究発表である。以下に発表の概要及び各セッションの状況等について報告する。

自然環境影響評価技法研究会

大会初日の Quantifying biodiversity impacts and resilience potential というセッションに参加し、自然環境影響評価技法研究会の研究成果を発表した。聴講者は約80名であった。セッションの主題は、生物多様性の定量評価であり、特に予測評価の手法論について口頭発表・パネルディスカッションを通じて活発な議論が行われた。

口頭発表に先立ち、座長である田中章教授(東京都市大学)から、定量評価が環境影響評価や生物多様性オフセットに不可欠な基盤技術であるとの指摘がなされた。

次に、4題の口頭発表が行われた。八木裕人氏(EA インターナショナル合同会社)からは、荒瀬ダム撤去事業におけるアユの生息地評価に関する事例が報告された。続いて、本研究会の研究成果である、里山生態系・里海生態系を対象とした生物多様性オフセット評価のケーススタディ事例を報告した。3題目は、Gunter Pamela 氏(AMEC Environment & Infrastructure)より、アメリカにおけるHEPを改良した新たな評価手法に関する報告がなされた。4題目は、Sangdon Lee 教授(梨花女子大学)より、韓国における植生ベースの評価に基づく Ecological Restoration Cooperation Funds(生態系再生協力基金)の事例が報告された。

パネルディスカッションでは、定量評価手法は「質×面積×時間」という基本的枠組みの共通性は見られるものの、質の捉え方は、特定種をベースとする場合(例:HEP)と植生をベースとする場合(例:ハビタットへクタール法)等、多様なアプローチがあると整理された。いずれの手法でも、普遍的な適用が目指されているわけではなく、各国の自然や法制度等、地域の文脈に応じて試行錯誤しつつ手法が開発されていると感じられた。里山・里海という特徴的な生態系の評価を巡っても、欧米手法を参照しつつも、地域の文脈に基づく評価手法の構築が重要と考えた。

(レポーター:清水建設(株) 渡部陽介)

新領域研究会 環境配慮 WG

大会最終日の5月14日に「Impact assessment of small things」のセッションに参加し、JEAS の新領域研究会における環境配慮 WG の研究成果をメンバー代表者として発表した。

本セッションでは、発表題目が 4 つあり、インドのヒマラヤ地域における小水力発電事業における計画・承認時の住民関与方法等に関する題目(発表者: Diduck, Alan 氏)と高等教育等における社会的影響評価に関する 2 題目(発表者: Adusei, Kwadwo 氏)、そして筆者が発表した、企業活動に資する自主的環境アセスメントの進め方(英名:「Proposal of EIA for private business in Japan」)という題目であった。

本WGでは、これまでの研究成果のうち①民間企業向けの自主アセスガイドブックの検討、②環境認証・環境金融制度で求められる環境配慮と環境アセスメントとの関連、③JEAS版自主アセス認証制度創設の検討の3点に着目し、発表した。

聴講者は30名程度であり、質疑の中で、「民間企業が主体である組織が自主アセスを推進する方法を検討していることに関して評価する」とのコメントをいただいた。このことから、本発表を通じて、日本において環境アセスメントを推進するJEASの取組を他国にアピールできたと考える。

また、本学会の JEAS ブースに展示していた本研究内容のポスターを見た参加者から、「アメリカのボストンにおいて自主アセスの認証制度があるので検討の参考になるのではないか」という情報・意見をいただいた。このように、今後 JEAS 版の自主アセス認証制度を検討していくうえで有益な情報もいただくことができた。

本発表を通じて得られた情報・意見を踏まえ、新領域研究会の環境配慮 WG の成果をとりまとめていきたい。

(レポーター:ドーコン(株) 土門優介)

アジア地域における環境影響評価に関する国際会議参加報告

開催日:2016年5月10日

開催場所:キャッスルプラザ(名古屋市)



アジア地域における環境影響評価の制度及び実施・運用 に関する現状を共有することで、急速な経済発展に直面す るアジア各国が有する共通課題を抽出し、各国においてよ り良い環境影響評価を実現するためのアジア地域内におけ る協力の推進を目的として、アジア地域における環境影響 評価に関する国際会議が、IAIA16名古屋大会に先がけ、5 月10日にキャッスルプラザ(名古屋市)で開催された。 今回の会議は、2015年5月に日本で開催されたワーク ショップに続き、「アジアにおける持続可能な開発のため の計画ツールとして環境影響評価を強化する」というテー マの下、アジア 15 ヵ国の政府担当者、国際機関(JBIC、 JICA、ADB、IFC等)、民間セクター、研究者、NGO等か ら約 100 名が参加した。

1. 会議の内容

本会議は、持続可能な開発における環境影響評価の重要 性に関して、ADBのヘラス・グナティラカ氏、原科幸彦 教授、スティーブン・リントナー博士、米国環境保護庁の デービス・ジョーンズ氏による基調講演より始まり、その 後、4つの分野におけるテーマ別分科会を行った。そして、 最後にパネルディスカッションが行われた。

1.1 テーマ別分科会

テーマ別分科会では、アジア地域における共通した4 つの個別の課題、1)環境影響評価の品質向上、2)情報 公開・公衆参加、3)環境管理・モニタリング計画の実施、 4) 戦略的環境アセスメント (SEA) の分野について、グルー プに分かれて議論が行われた。各グループでは、各国の代 表がグッドプラクティスを発表し、各国の現状や課題など を共有し、問題の根本的な原因や今後の課題について議論 を行った。筆者が参加した、"環境管理・モニタリング計 画の実施"のグループでは、ベトナムによる予算内での優 先順位を付けたモニタリングの実施、及び環境影響評価を 事業契約 (Concession Agreement) に取り込む制度を導 入したラオスの事例が紹介された。そこでのグループディ

スカッションでは、グループに参加したさまざまな国より、 事業承認と環境管理・モニタリング計画とのつながりが弱 いことなどが問題として挙げられており、ラオスより紹介 された事例などは、その問題に対処する一つの解決策とし て認識された。また、モニタリングにおける自動計測装置 の活用も指摘された。

1.2 パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、アジア8ヵ国により、3 つのサブテーマ、1) インフラ開発・産業開発に環境配慮 を取り組む事業計画ツールとしての環境影響評価、2)参 加型・協議型意思決定プロセスとしての環境影響評価、3) 持続可能な開発のための政策立案ツールとしての SEA に ついて討論が行われた。さらに、気候変動、生物多様性、 累積的影響評価及び持続可能な開発といった問題に対応し ていくことが重要であると確認された。

2. 所感

急速な経済発展に直面しているアジア地域において持続 可能な開発を進めるためには、環境影響評価制度及びその 運用を改善することが喫緊の課題である。本会議は、アジ ア各国のネットワークを強化し、各国の事例紹介及び国際 開発支援機関などからの意見等を通じてアジア各国の環境 影響評価制度の強化の促進につながる非常に有意義な会議 であると感じた。

一方、各国の環境影響評価制度の運用には、それらの国 の事情や発展の度合い等を反映した差異も存在している。

各国共通の問題として認識されている環境影響評価制度 の運用のためのキャパシティ向上及び実践のためには、さ らに踏み込んだ相互間の協力とサポートが必要になると考 えられる。今後も引き続きアジア各国間での協議を継続す ると共に、関係国及び関係者の更なる協力のもと、より適 切で有効な環境影響評価及び確実な対策の実施が行われる ことが期待される。

(レポーター: イー・アール・エム日本 (株) 鈴木洋平)



EAS ESSAY



山岳写真家の現場から

山岳写真家 村田一朗

皆さん初めまして。第1回 JEAS フォトコンテストから特別委員として参加させていただいている山岳写真家の村田一朗です。

北アルプスの表銀座を中心に朝夕の撮影はもちろんのこと、星空の撮影も行っています。私が星の写真を撮り始めたころは、山で星を撮る人などまったくと言っていいほどいなかったのですが、雑誌媒体に発表し始めて数年、今では一晩中撮影している人が絶えません。

星の写真を撮るには北アルプスの燕岳がロケーション的にも、アクセス的にも、小屋の設備的にも最適なのです。 今年の GW もそこにお世話になって撮影をしてきました。

皆さんもご存じのように今年の春は早く、山でも雪解けが例年になく早い年でした。山小屋のご主人も「こんな年は初めてだ」と、言っていました。私が見ても1月ほど早い雪解けで、GW だというのに、まるで梅雨入りの頃の雪の量でした。例年だと GW でも吹雪いて、氷点下 10度以下もざらにあります。年末年始だとこれが、氷点下 20度で普通です。さらに風速が 20m 位吹きますので体感温度は - 40度位になります。

こんな環境に適応した生き物は何種類かいますが、氷河期からの生き残りとして有名なライチョウがいます。キツネなどの天敵を避けるために、姿を現すのは殆ど悪天候の時です。そのため、ライチョウを見ると天気が崩れるとすら言われます。ライチョウは夏毛と冬毛が生え変わりますが、冬は全身真っ白、夏はこれに黒い毛が混じって白と黒のぶちのようになります。今年のように雪解けが早いと、本来保護色であるはずの真っ白な状態が、却って目立ってしまいます。そのために天敵に見つかりやすくなり、個体数が減ってしまうのではないか? と危惧しています。こう言った厳しい環境に住む生き物たちにとってわれわれ人間があまり気にしないことが生死を分けることもあるようです。

登山者のなかには、ミカンの皮やゆで卵の殻などは「自然にかえる」と言ってその辺に捨ててしまう人がいます。ところが、微生物が少ない山のなかではミカンの皮はなかなか分解されません。ゆで卵は、もちろんニワトリの卵で

すが、実はライチョウは二ワトリの仲間なのだそうです。 そのため、二ワトリの病気にライチョウもかかってしまう そうです。そう、ゆで卵の殻を捨てるというのは、病原菌 をばらまいているのと同じなのです。

そうそう、ライチョウの話に戻しましょう。先ほどの山小屋のご主人が言うにはライチョウも人を見るそうです。ライチョウの写真を見て、「ライチョウを追いかけまわして撮るから、ライチョウが嫌そうな顔をしている」と言うかと思えば「A 君はどうなっているんだ? ライチョウがA 君の足元をわざわざ通って歩いて行ったぞ」。そう言うご主人自身は数年前に「カメラを向けるとポーズを取るライチョウがいる」と言ってよく撮っていたようです。では、私はどうかと言うと、あまりライチョウには好かれないタイプらしくカメラを向けるとよく逃げられてしまいます。

ここで少し、私の仕事について書いてみます。私は山岳写真家なのでもちろん山の写真を撮ります。山岳写真といえども風景写真の延長なので、朝夕の撮影がもっとも絵にしやすいのは同じです。また、山の風景というものは、何十年のオーダーではなかなか変わるものではないので、白黒の時代に撮られた作品と差別化するのが難しいジャンルです。山岳写真の進化は白黒からカラーへ、そしてデジタルへと移ってきた時代の流れをなぞっているだけとも言えます。絵画の世界に比べて作者が誰なのか? 判断しづらいのも写真の世界です。そんなこともあって、山岳写真の世界は大きく変貌をすることなく、伝統的な作品スタイルのまま現代に至っていると言えます。

そんなこともあって、私の撮影は朝夕より日中の方が主となっています。先人たちが見落としたものを、一つ一つ 丹念に探し出して作品にしていく。それは一種、宝探しのようなものでもあります。なかなか簡単には見つかってくれない所なんかもそっくりです。

ここでキーワードになるのは PC による後処理です。従来の方法ではなく、新しい後処理を行うことができるかどうか? 画像処理ソフトの代表である Photoshop などを上手く使ってフィルムでは難しかったことを PC 上で上手く処理することができるかどうか? で作品が違ってきま



す。よく「デジタルは後からどうにでもなるから、失敗し ても大丈夫」と言う人がいますが、これは大きな間違いで す。「デジタルは後からどうにでもなるように、キッチリ 撮っておく」が正しいのです。失敗したものは救済しても、 元からきちんと撮ったものには大きく負けます。デジタル のメリットは後で気が変わった時でも、どのようにでも柔 軟に対応できるように最善を尽くして撮っておくと、5年 後・10年後でも活かすことができるのです。いつの時代 でも、手抜きしたものの方が優れた結果を出す…ことは無 いのです。

こう言ったスタンスは実は写真を始めたころからあまり 変わっていません。私は撮影するときによく三脚を使いま す。それをみて「プロだからできるんだよなぁ…」と何度 も言われた経験があります。実はこれも間違いで、基本が きちんとできていなければプロにはなれないのです。だか ら、三脚を立てる必要がある場合に、三脚を当然のように 立てているだけで、それはカメラを始めた直後からそうで した。プロになってから、三脚を立てるようになったわけ ではないのです。そもそもプロを目指していた訳ではなく、 単に好きで撮っているうちに、プロになってしまった私に とっては、プロがどうしているか? よりも良い写真を撮 るにはどうするか? しか興味がなかったといっても良い でしょう。そんなことをしているうちに、いつの間にかプ 口として通用するようになっていた訳です。

プロに転向できるかどうか? は上手いかどうか? よ りも実は、「自分の写真にお金を払ってくれる人を見つけ られるかどうか?」が大切です。もしもプロに転向したい と考えている方がいらっしゃったら、このことを気にかけ ておくと良いです。ただ、ある程度上手くないと、そう言 う人を見つけることが困難だと思います。

脱線したので話をもとに戻しましょう。先ほども書いた ように、山岳写真の世界は昔からあまり変化がありません。 でも、今はデジタルの時代なので個人レベルでできること が増え、従来は手間がかかりすぎて現実的ではなかった手 法も、取り入れることができるようになってきました。山 岳写真の世界では星と山をからめた作品も昔からありまし

た。デジタルでも同様の撮影は可能なのですが、比較的初 期のデジカメは長時間露光が苦手でした。そんな時代に、 「数秒のシャッタースピードで連続して数千枚撮影し、そ れらをすべて比較明合成と言う方法で合成すれば、コント ラストの高い星の軌跡を描かせることができる。」と言い だした人がいて、その人は銀座のど真ん中で星の軌跡を描 かせました。その頃に私も同様のアイディアにたどり着き、 ネットで調べているときにその人のことを知り、コンタク トを取り、自分流にアレンジして、私は厳冬期の北アルプ ス稜線で12時間オーバーの撮影をしました。2009年の 話です。それはある雑誌のギャラリーと表紙を飾ることと なり、私のところへは山岳星景の仕事の依頼が多く舞い込 むようになりました。

時代の流れに対し、時代を追いかけていくのか? 時代 を自ら作り出していくのか? それは後者の方が数段楽し い人生が待っているのは間違いないです。



Profile

村田一朗氏 Ichiro MURATA

山岳写真家

■執筆者略歴

1964年3月東京生まれ。1986年3月東海大学海洋学部海洋工 学科卒。某電機メーカーに20年勤務後にフリーの山岳写真家と して独立。1999年から本格的にデジタル一眼でも山岳写真を撮 り始め、写真雑誌に多数掲載。2010年以降、山岳星景の第一 人者としても活躍中。 http://murata-photo.com/

平成28年度通常総会/懇親会

一般社団法人日本環境アセスメント協会は、5月30日に平成28年度通常総会を開催した。会場となっ た東京都千代田区平河町のルポール麹町には、全国から多数の会員が参集した。 当日の様子を総会ならびに総会後に開催された懇親会とあわせて報告する。

総 会

出席会員数は、委任状を含めて111法人となり、本総 会が成立することが確認された。議長には梶谷修会長が選 任され、総会の開会を宣言した。

報告事項として「平成27年度事業報告」の説明、決議 事項として「平成27年度決算報告」の説明があり、所英樹、 髙塚敏両監事から決算報告等が適正である旨の監査報告が 行われた。引き続き「平成28年度事業計画」、「平成28 年度収支予算」及び「役員選任の件」の説明があり、すべ ての議案は本総会において異議なく承認された。

平成28年度事業計画 (2016年4月1日~2017年3月31日)

1. 事業活動方針

高度成長期が終焉を迎えて、近年アセス審査対象の新規 案件は減少の一途を辿っていたが、改正アセス法の全面施 行や昨年末のCOP21で決議されたパリ協定を背景に、自 然再生可能エネルギーである風力発電事業等のアセス審査 対象案件が大幅に増加しており、「配慮書」の実績も蓄積 されつつある。これから本格化する事後調査対応の「報告 書」についても、今後その取扱い等の課題が議論になると 思われる。折しも、アセス分野で最も権威のある国際組織 である IAIA(国際影響評価学会)の世界大会が本年 5 月 に日本(名古屋)で初めて開催され、環境アセスに対して 改めてその重要性が認知される契機となった。

環境アセスメント十に関しても、国土交通省の建設環境 分野の民間の技術者資格としての登録が叶い、大きな一歩 を踏み出す契機を迎えたが、このような状況の下、当協 会では、昨年度、「会員メリットの向上」、「活動領域の拡 大」、「アセス士資格の有効性向上」及び「諸活動の PR 強化」 を基軸とした『新・中期計画 2018』を策定した。

今年度は、本計画に基づき、前述した新たな事業展開の ベクトルを確実に捉え、会員企業とともに、次の主要施策 をはじめ効果的な活動を積極的に実行し、大きな発展の第 一歩を歩む方針とする。



2. 平成 28 年度 主要施策

本総会において、梶谷会長より前段の事業活動方針を踏 まえて、以下の4つの主要施策が紹介された。

○資格制度「環境アセスメント十」の活躍の場の拡大

平成17年度からスタートした協会認定資格制度「環境 アセスメント士」は、本年2月に国土交通省の「公共事 業に関する調査及び設計等の品質確保に資する技術者資格 登録」に登録され、今後、国交省や他省庁、自治体の発注 業務において管理技術者として活躍の場が大きく広がるこ とが期待される。

○風力発電事業等の再生可能エネルギー分野に関わる環境 影響評価の進展への貢献

風力発電事業等のアセスの審査対象案件が大幅に増加し ており、これらの事業の配慮書手続き、準備書、事後調査 報告書などアセスの新たな制度・技術に向けたセミナー・ 研修、調査研究等を引き続き推進する。

○環境リスク等環境アセス技術の適用領域の拡大

「環境アセスメント士」がその専門技術者として位置づ けられている「環境リスク調査融資促進利子補給事業」に おいて、要件となっている環境影響調査について、昨年度 協会内に設置した助言委員会の運営業務を引き続き行う。 さらに温暖化対策や災害リスク評価等の事前影響予測・評 価等のアセス技術の重要度が一層増すと予想される。

○アジア等の持続的発展への貢献

本年5月に開催されたIAIA16の世界大会に、当協会も 協力団体として大会実行委員会の活動、研究発表、ブース 出展等積極的に参加した。大会では、特にアジア諸国等の 発展に向けたインフラ整備や開発にともない、環境社会配 慮の制度的、技術的なニーズが感じられた。これらのニー ズを的確に捉えて、今後当協会としてアセアン諸国等の交 流について積極的に対応していく。

(編集委員:中村 健)

懇親会

通常総会終了後、会場をマーブルの間に移し、150名も の出席者を迎えて、加藤辰彦事務局長の司会により懇親会 が開始された。



冒頭、梶谷修会長より、来賓の方々への お礼の言葉に始まり、開会の挨拶があった。 「先ほどの通常総会におきまして、役員改選 が行われ、私は会長として再任されました。 新しい気持ちで皆さまとともに協会発展の ために、最善の努力をいたす決意でありま

す。」と抱負を述べた。

続いて、ご来賓を代表して環境省の平口 洋環境副大臣から「環境アセスメントの案 件数は、近年風力発電所を中心に増え続け てきております。一方、昨年12月のパリ 協定、今月の地球温暖化対策計画の策定、 改正地球温暖化対策推進法の成立などを踏



まえて、今年は地球温暖化対策を推進していくうえで、重 要な一年です。こうした状況のもとで、環境アセスメント の重要性は今後ますます高まっていくものと確信しており ます。日本環境アセスメント協会におかれましては、環境 省と連携して、毎年度、環境アセスメントに関する研修を 行っていただいており、多くの会員の皆さまにもご参加い ただいています。今後とも引き続き、環境アセスメントの 普及や技術の向上にご尽力いただきますことを心からお願 い申し上げます。」とのご挨拶をいただいた。



続いて、山東昭子参議院議員よりご挨拶 をいただいた。「梶谷会長のもと、無事に総 会が開かれまして、大変おめでとうござい ます。ちょうど日本環境アセスメント協会 が設立されたときに、私が環境政務次官を 拝命いたしまして、最初から今日までずっ

と乾杯の音頭をやっております。日本の経済というもの、 いろいろ言われておりますけれども、今や環境ビジネスに よって、景気浮揚、必ず大きなうねりに入ると思っており ます。わが国が環境問題のリーダーとして、世界のトップ を走るためには、この協会の皆さま方の技術、研究、そし て皆さま方一致団結して臨むことが素晴らしい成果につな がると思っております。皆さま方のご健康と、この協会の ますますの発展を心から願って、杯をあげたいと思います。」 と当協会への期待の言葉をいただき、乾杯となった。

乾杯に引き続き、たくさんのおいしい料理をいただきな

がら、多数のご来賓の方々や会員相互の賑やかな歓談の時 間となった。



三好信俊総合環境政策局長

三好信俊総合環境政策局長からは、「環境 影響評価を担っていただいている日本環境 アセスメント協会の皆さまが、現場現場で 良好な環境保全の観点から、適切な下支え をしていただき、実際の案件の積み重ねの 中で、環境影響評価が信頼を得ていると思っ

ております。行政と協会とが一体となって、今後ますます ご協力いただきたいと思っております。よろしくお願いい たします。」とのご挨拶をいただいた。

国土交通省からは、池田豊人大臣官房技 術審議官にご挨拶をいただいた。「全国津々 浦々で、高速道路をはじめ環境アセスメン トの面で皆さま方には大変お世話になって おりまして、ありがとうございます。先般、 熊本の地震も予想以上に被害も大きいです



池田豊人大臣官房技術審議官

けれども、いよいよ国土の強靭化に向けてインフラづくり を行う時代になってまいりました。環境と調和した国土の 強靭化をすすめたいと思います。そのためには、ぜひ皆さ ま方のご指導をお願いしたいと思います。」とのご挨拶をい ただいた。



田畑日出男名誉会長

田畑日出男名誉会長からは、「昭和53年 にスタートした当協会も、2年後には40周 年を迎えます。スタートしたときから若い 人の勉強会、人材育成にあたってきました。 開発行為と環境保全を両立させるというこ とをこの協会が確保したということ、歴代

の会員の皆さま方のご尽力の賜物で、社会に貢献したもの だと思っております。このことに感謝を申し上げます。」と の感謝の言葉を述べられた。

途中、通常総会で選任された新任理事 の紹介があり、最後に山本芳幸副会長が、 「今年から、今後の当協会のあり方を取り まとめようという動きを予定しておりま す。本日おいでいただきました皆さまに は、今後進むべき方向を議論する場所を



協会として用意したいと思いますので、その節には忌憚の ないご意見を賜りますようお願い申し上げます。」と述べ、 中締めとなった。

(レポーター:(株) 建設技術研究所 熊谷 仁/上原 励)

1/2.5万植生図をもとにした新たな植生自然度について

環境省自然環境局生物多様性センター 専門調査官 廣澤

植生自然度とは、植生に対する人為的影響の度合いに よって、日本の植生を10の類型に区分したものであり、 環境省の第1回~第5回自然環境保全基礎調査(1973~ 1999年)において考案された。環境アセスメントの手続 き上、事業の早期段階の手続きである配慮書や方法書にお いて自然環境の現況を把握するための一つの目安としても 用いられており、植生自然度に基づき、環境へ及ぼす影響 に配慮などが検討されている。

従来の植生自然度は、環境省が作成した 1/5 万植生図 の凡例に対応させたものであるが、現在、作成を進めてい る、より詳細な 1/2.5 万植生図の統一凡例には植生自然度 が設定されておらず、そのため近年、利用者が植生自然度 の考え方を 1/2.5 万植生図へ便宜的に当てはめざるを得な い事態が生じている。このような状況を放置すれば、場合 によっては植生自然度の誤った利用にもつながりかねない ことから、当センターでは本年3月に1/2.5万植生図の 統一凡例に対応する植生自然度を整理・公表した。今回は その内容を紹介する。

まず、1/2.5 万植生図の統一凡例に対応する植生自然度 の整理にあたっては、以下を主な方針とすることとした。

- ・ 1/2.5 万植生図の植生自然度は、基本的に 1/5 万植生図 の考え方を踏襲し、植生に対する人為的影響の度合いに より、日本の植生を10の類型に区分するものとする。 ただし、1/5万植生図と一律に合わせるのでなく、人為 的影響の度合いと植生の相観により整理する。
- 外来種群落やシカ食害等の新規凡例については、新たに 自然度を設定する。
- ・ 植生自然度は凡例全体に一定であるものではなく、立地 や管理状況を反映し、組成が異なると自然度も異なる場 合がある。そのため、必要な場合には環境アセスメント 実施者等の利用者が現地で確認し、個別に自然度をあて はめるものとする。

このような考え方に基づいて整理した植生自然度の区分 内容及び区分基準を表-1に示す。また、植生自然度の 利用に関する注意事項や活用法についても併せて公表して いるが、利用の際の注意事項については主に以下のとおり である。

・ 植生自然度は、ある植生(群落)に対する自然性の尺度 を表した類型区分である。便宜的に1から10の数字で

■表-1 統一凡例(1/2.5 万植生図)の植生自然度区分

植生 自然度	区分内容	区分基準
10	自然草原	高山ハイデ、風衝草原、自然草原等、自然植生 のうち単層の植物社会を形成する地区
9	自然林	エゾマツ-トドマツ群集、ブナ群落等、自然植生の うち低木林、高木林の植物社会を形成する地区
8	二次林 (自然林に近いもの)	ブナ - ミズナラ群落、シイ・カシ二次林等、代
7	二次林	クリ・ミズナラ群集、コナラ群落等、繰り返し 伐採されている一般に二次林と呼ばれている代 償植生地区
6	植林地	常緑針葉樹、落葉針葉樹、常緑広葉樹等の植林地、アカメガシワ等の低木林
5	二次草原 (背の高い草原)	ササ群落、ススキ群落等の背丈の高い草原、伝 統的な管理を受けて持続している構成種の多い 草原
4	二次草原 (背の低い草原)	シバ群落等の背丈の低い草原、伐採直後の草原、 路傍・空地雑草群落、放棄畑雑草群落、シカ食 害草原
3	外来種植林農耕地 (樹園地)	竹林、外来種の植林・二次林・低木林、果樹園、 茶畑、残存・植栽樹群をもった公園、墓地等
2	外来種草原農耕地 (水田・畑)	外来種の草原、畑、水田等の耕作地、緑の多い 住宅地
1	市街地等	市街地、造成地等の植生のほとんど存在しない 地区

植生自然度の 10 区分に対応する統一凡例等については、当センターの -ムページ参照 http://www.biodic.go.ip/

表しているが、数値として扱えるものではない。従って、 植生自然度が高ければ保全の優先度が高いといった単一 の価値尺度として捉えるべきものではない。

- ・ 植生自然度は、1/5 万植生図のスケールで考案した植生 の相観に基づく尺度であり、植生図のスケールが異なれ ば植生自然度の区分が異なる場合がある。
- ・植生自然度は、植生図の凡例に対して付加した尺度であ り、それぞれの立地毎にみた個別の群落に対する自然性 の尺度ではない。ある立地に成立していた植生(群落) が変化すれば尺度も変化する。
- 生物多様性の観点から特に注意を要する外来植物、シカ 食害等の影響を受けている植生については、相観に基づ く区分とは別の尺度から植生自然度を区分している。

最後に、これは環境アセスメントに携わるすべての方々 にお伝えしたい点でもあるが、植生自然度はあくまでも植 生(群落)に対する見方のひとつであり、生物多様性分野 の環境アセスメントでは、希少種やバイオマス、生態系等 の概念による、より総合的な視点が必要である。また、植 生(群落)の重要度は全国一律に決められるものではない ことから、環境アセスメントでは現地調査等を行いながら、 最新の知見に基づき、地域毎に具体的な評価が行われるこ とが望ましい。このような視点を持った環境アセスメント の基礎データとして、当センターのデータが広く活用され ることを期待している。



、環境アセスメント士 紹介





自然環境部門(2008年) 栗原幹雄

環境アセスメント士資格への期待

私が勤務する環境テクノス株式会社 は、1973年に環境分析を手がける公 害研究所として創業し、以降は各種環 境アセスメント、生態系調査、作業環 境測定、環境設備の設計・施工・管理 など、環境総合コンサルタントとして

事業領域を拡大してきました。また、中国の上海や大連に合弁 会社を設立し、国際的な環境ビジネスの展開も図っています。

私が所属するコンサルタント事業部環境調査課は、河川や海 域の生活環境調査から、陸域の猛禽類・動植物・生態系などの 自然環境調査に至るまで、幅広い環境アセスメント関連業務を 担当しています。

私は、道路、河川、発電所、廃棄物処分場、埋め立て、港湾 計画といった多岐に渡る事業に関わる環境アセスメントを経験 してきました。近年は、洋上風力発電やメガソーラー、小水力 発電など再生可能エネルギーの導入にともなう環境アセスメン トなど、従来の技術を応用するような業務も増えつつあり、相 応の技術力も必要となってきています。このように、環境アセ スメント士として、新たな視点に立った業務も増加しつつあり

ますが、環境アセスメント士という資格を使って活躍できる機 会はまだまだ少ないのが現状です。今後、環境アセスメント士 が入札要件等に加わる機会が多くなれば、資格保有者も増え、 技術力向上や地位向上が図れるものと考えられます。積極的な 活用に期待するとともに、環境アセスメント士という資格が広 く認識されるよう、微力ながら貢献していきたいと思います。

写真は当社製品の「溶出試験用土壌標準物質」です。土壌に 含まれる分析対象物質の含有量が明確で、その値が保証された 標準物質です。2015年に「北九州オンリーワン企業特別賞」 を受賞しました。製品にはカドミウムや鉛などの重金属のほか、 ダイオキシン類や放射能測定用などの標準物質もあり、公益社 団法人日本分析化学会を通じ、日本全国の研究機関や海外に出 荷しています。



溶出試験用土壌標準物質

環境テクノス株式会社

TEL.093-883-0150 http://www.kan-tec.co.ip/



自然環境部門(2011年) 城内智行

もの言わぬ生き物からのメッセージを伝えます

私が所属する一般財団法人九州環境 管理協会は、1970年に前身の九州水 質分析研究会として設立して以来、福 岡市を拠点に、『豊かな環境の保全創 造を通して、持続可能な循環型社会の 実現』の理念のもと、さまざまな事業

を展開しています。環境調査、分析試験、環境アセスメントな どの業務のほかに、福島の放射能汚染問題や二枚貝類の減少に 代表される有明海環境変化などの社会的な問題についても、調 査をとおして取り組んでいます。

私は、2003年の入社以来、九州各地の水生生物調査・分析、 各種毒性試験、絶滅危惧種の保全活動などに携わってきました。 少しでも多くの生き物のメッセージを伝えることができるよう に、日々の業務に励んできました。

福岡県朝倉市に自生する絶滅危惧Ⅰ類(環境省)のオキチモ ズクの保全については、関連の道路事業の環境アセスメントか ら事後評価まで約10年間、ライフワークとして取り組んでき ました。成果としては、淡水産藻類の生育環境の解明、移植の 成功、HSIモデルの構築などが挙げられます。本事例では、水 路管理者である地元住民、藻類の専門家及び工事の実施主体で ある自治体の緊密な連携・協力体制が構築され、協働した保全 対策を実施することができたことにより、生育が認識されるこ ともなく絶滅することが多い淡水産藻類では、大変珍しい成功 ケースとすることができました。

また、私は、魚類耳石のストロンチウム・カルシウム比の分 析による回遊履歴の調査研究、免疫染色法による二枚貝類浮遊 幼生の分析、アオコの毒素の分析などの最新技術の導入により、 生き物からの新たなメッセージの発信にも尽力しています。

環境アセスメント士の CPD のポイントについては、国の総 合評価入札方式における管理技術者の継続教育の証明として使 用させていただいており、大変助かっています。今後も自己研 鑽を重ね、環境アセスメント士として、環境保全に貢献できる よう努めていきたいと考えています。



(一財)九州環境管理協会

TEL.092-662-0410 http://www.keea.or.ip/

IEASREPORT



REPORT 1

第1回公開セミナー・レポート

1.外来種問題とその対策について

講師 環境省自然環境局外来生物対策室長 曽宮和夫 2.滋賀県・琵琶湖における外来生物対策

講師 滋賀県立琵琶湖博物館専門学芸員 中井克樹 3.小笠原諸島におけるグリーンアノールの駆除

講師 元(一財)自然環境研究センター上席研究員 森 孝順 4.ミシシッピアカミミガメの駆除について

講師認定NPO法人生態工房理事 片岡友美

期日: 2016年2月4日

2015年3月に公表された「外来種被害防止行動計画」 などの外来生物に関するさまざまな取り組みを受けて、外 来種に関する問題点や法制度の概要、現場での駆除等の実 際について、最前線でご活躍の方々にお話をうかがった。

1. 外来種問題とその対策について

外来種とは何か、外来種問題とは何か、外来種対策の経 緯等、本セミナーの導入部分を分かりやすく解説された。 また、「外来種被害防止行動計画」と同時に公表された「生 態系被害防止外来種リスト」やマングース駆除事例から、 外来種の根絶の難しさを説明いただいた。

2. 滋賀県・琵琶湖における外来生物対策

日本最大の湖である琵琶湖と、琵琶湖における外来種問 題の歴史、近年の対策を紹介いただいた。外来魚(ブルー ギル等)の駆除は、地元漁師への経済的な支援によって継 続的に取り組める体制を構築されていた。また、外来植物 (オオバナミズキンバイ等) は、駆除努力を上回る増殖力 への対応や駆除後の処分方法が課題として挙げられた。

3. 小笠原諸島におけるグリーンアノールの駆除

世界遺産である小笠原と、グリーンアノール駆除対策を 紹介いただいた。説明会を開いて地域の理解と協力を得な がら、ゴキブリ捕りのような粘着式のワナを用いて駆除を 進めていること、島特有の作業環境の過酷さや、新たな外 来種の侵入対策等の課題等を説明いただいた。

4. ミシシッピアカミミガメの駆除について

本種の拡大の歴史から周囲に与える影響と駆除の実態に ついて説明いただいた。捕獲には、従来の篭罠のほか、捕 獲効率の高い日光浴罠(浮島型)を地域住民等と共に改良 を加えながら使用しているとのことである。

外来種は、一度定着してしまうとその根絶は非常に困難 であること、根絶には、研究者、地域住民等を巻き込んだ 継続的な取り組みが必要であると改めて感じたセミナーで あった。

(レポーター:国際航業(株) 鶴間亮一)

REPORT 2

第2回公開セミナー・レポート

1. 「環境未来都市構想」について 内閣府地方創生推進室 参事官 高畠昌明 2. 「環境未来都市」の戦略的取り組みと震災復興

国立環境研究所社会環境システム研究センター センター長 藤田 壮 3.東松島の復興まちづくり

宮城県東松島市復興政策部復興政策課兼環境未来都市推進室 課長 高橋宗也 4.岩手県大槌町における復興の課題と環境配慮

鹿島建設(株)環境本部環境ソリューショングループ 担当部長 三浦一彦 5. 「復興アセスのすすめ」について JEAS 理事 河合 徹

期日: 2016年2月25日

1. 「環境未来都市構想」について

内閣府地方創生推進室が選定した 11 の環境未来都市の うち、6都市が被災地である。環境と超高齢化社会への対 応から、希望のみえる町の例として、宮城県岩沼市の住み 続けたいコミュニティ形成の計画、新地町の地域エネル ギーの活用計画の紹介があった。

2. 「環境未来都市」の戦略的取り組みと震災復興

国立環境研究所による、福島県版地域モデルの提供、エ ネルギー技術の適地でのまちづくりや、情報通信技術を活 用したコミュニティ支援が紹介された。緊急対応→生活復 旧→社会づくりと課題が移る中で、地域の環境・社会経済 の資源・基盤を活かすまちづくりが必要とのお話であった。

3. 東松島の復興まちづくり

2003年の宮城県北部連続地震の経験から、東松島市は 市建設業協会と災害協定を結んでおり、今回の災害廃棄物 のリサイクル率は99%に達したという。また、住民自ら が移転先を踏査し、島では緊急時に自立してエネルギー供 給が行える整備を進めている。「すべてを失ったので、ゼ 口からスタートできる。」という発言が印象的であった。

4. 岩手県大槌町における復興の課題と環境配慮

応援職員として1年半働いた経験に基づく講演であっ た。復興計画で想定した人口、施設立地に対して、現実は もっと小規模になる見込みで、計画のあり方を考えてしま うとのお話であった。また、一番の海水浴場が水面下とな り、汽水性植物等の進出には専門家が注目する。震災での 変化について土木学会等第三者的な立場からの意見を求め たという。

5. 「復興アセスのすすめ」について

女川町中心部復興土地区画整理事業における自主アセス の事例紹介があった。こうした事例、環境配慮事例、環境 モニタリング事例の蓄積と情報発信が必要で、防災におけ る住民対話は大切であるとのお話であった。

(レポーター:日本工営(株) 渡辺純子)

IEAS 資格・教育センター便り

1. 公共工事に関する調査及び設計等の品質確保に資す る技術者資格登録について

前報でもお知らせしましたが、2016年2月24日付で、 環境アセスメント士が国土交通省の「公共工事に関する調 査及び設計等の品質確保に資する技術者資格登録規程」 に基づく建設環境分野調査業務の管理技術者資格として登 録されました。今後、国や地方公共団体等が発注する業務 において、環境アセスメント士を入札参加資格(管理技術者) として求めることや、総合評価落札方式において加点評価 の対象とすること等が期待されます。

社会資本の整備、維持、更新を適切に実施するためには、 計画・調査・設計や維持管理における点検・診断等の品 質確保が重要であり、これらの業務に携わる技術者の能力 を評価したうえで活用することが望まれています。このような 背景をもとに、国土交通省では2014年11月28日付で「公 共工事に関する調査及び設計等の品質確保に資する技術 者登録規程」を制定しました。本規程は、公共工事に関す る調査及び設計業務に関し、その業務の内容に応じて必要 な知識又は技術を有する者の能力を適切に評価することので きる資格の登録に関し、必要な事項を定めたものです。

制定初年度は維持管理分野(点検・診断等業務)に関 連する資格のみが登録申請の対象でしたが、昨年度新たに 計画・調査・設計業務も申請の対象となりました。そこで、 2015年12月に協会認定資格である環境アセスメント士を 当該技術者資格として申請し、晴れて国土交通省の認可登 録を受けることができました。

当協会としても、これを機に、環境アセスメント士の活用 についてさらに積極的に取り組んでいく所存です。

技術者資格登録制度等に関する詳細は、国土交通省の 報道発表資料をご参照ください。

国土交通省報道発表(2016年2月24日)

「111 の民間資格を新たに登録

~社会資本の計画・調査・設計分野も加え、発注業務 で積極活用~

http://www.mlit.go.jp/report/press/kanbo08_ hh_000327.html

2. 2016 年度「環境アセスメント士」認定資格試験受 験申込み開始

(1) 受験申込受付開始: 2016年7月11日(月) から受 験申込受付を開始します。申込書は協会ホームページ からダウンロードしてください。 http://www.jeas.org

「資格・教育センター」では、「環境アセスメント士」の「認定資格試 験」や「継続教育(CPD)制度」に関する情報やご案内を「JEAS ニュース」に毎号掲載しています。

- (2) 受験料: 12,000円
- (3) 受付終了日: 2016年10月7日(金)
- (4) 試験日時: 2016年11月23日(水・祝)10時~ 16 時 45 分
- (5) 試験場所: 仙台、東京、名古屋、沖縄の4会場 (2017年度は札幌、東京、大阪、福岡の4会場を予定)
- (6) 過去問題集: 2010~2015年度までの過去問題集 を販売中です。詳細はホームページをご覧ください。「生 活環境部門」、「自然環境部門」に分かれています。

3. 2016 年度の資格更新

2016 年度の資格更新手続については、2017 年 2 月 1 日 (水)から4月28日(金)まで受付を行います。今年度は、 2011 年度に登録された方(登録番号が H23 で始まる方) が対象ですが、2009、2010年度で更新をされていない方 (登録番号が H21、H22 で始まる方)も対象になります。 この方は現在更新保留者となっており、資格更新には条件 があります。また、資格更新を助成するため「指定論文受付」 も行っております。詳細については、ホームページ中の「資 格の更新の手引き」、「JEAS-CPD ガイドブック」でご確認 ください。

4. JEAS-CPD 記録登録について

環境アセスメント士の技術レベルの維持・向上、倫理観 の涵養等を図るため、継続教育を義務付けております。

- ・詳細はホームページの「JEAS-CPD ガイドブック」にてご 確認ください。(ダウンロード可)
- ・CPD 記録証明書の発行も行っております。
- ・CPD の記録登録は随時行っております。 記録データがあ る程度まとまりましたら、資格・教育センター事務局までお 送りください。
- ・協会主催の各種セミナーについては、講演内容をセミナー・ 研修ライブラリーとしてホームページ(会員専用ページ)に 掲載しております。ライブラリーのコンテンツを視聴すること により CPD 単位の取得も可能です。 特にセミナーへの参 加が難しい地方にお住まいの環境アセスメント士の方は是 非ご活用ください。

5. 変更届の提出について

住所や勤務地が変わられた場合は、速やかに変更届の提 出をお願いいたします。(変更届はホームページからダウンロー ドしてお使いください。)

(資格・教育センター事務局)

nformation あ知らせ

協会活動記録

研修部会

第1回会員向けセミナー 22名

2016年4月12日(火)

環境省予算の概要説明会

環境省総合環境政策局環境影響評価課 課長補佐 福嶋慶三

平成28年度 技術士第二次試験受験講習 会 11名

2016年4月16日(土)

- (1)技術士試験について
- ~技術士第二次試験制度と特徴、申込書の 書き方、受験勉強の進め方~

日本工営(株) 黒崎靖介

- (2)出題の傾向と対策
- ①環境部門・環境影響評価

(株)東京久栄 小堀隆憲

②環境部門・自然環境保全

いであ(株) 大坪二郎

③環境部門・環境保全計画

(株)建設技術研究所 齋藤大樹

④建設部門·建設環境

八千代エンジニヤリング(株) 立林泰典

5建設部門・建設環境

(株)建設環境研究所 多賀大輔

中部支部

平成28年度 環境アセスメント士・技術士二 次試験受験講習会 16名

2016年5月20日(金)

- (1)環境アセスメント士
- ①合格受験講座(試験説明及び傾向と対策 について)

資格・教育センター事務局長 栗本洋二

②合格受験講座(自然環境部門)

玉野総合コンサルタント(株)

- (2)技術士二次試験
- ①合格受験講座(環境部門)

(一財)三重県環境保全事業団 瀬古直樹

②合格受験講座(建設部門)

(株)環境科学研究所 貝川裕一

環境アセスメント学会からのお知らせ

2016 年度大会開催のご案内

環境アセスメント学会の2016年度研究発表大会は、下記のとおり開催されます。 本大会では、研究発表のほか、シンポジウムと特別集会、ポスターセッションが行われ ます。JEAS会員の皆さまも奮ってご参加ください。

- 1.期間:9月9日(金)~10日(十)
- 2. 場所:中央大学後楽園キャンパス5号館、6号館
- 3. 主要内容:研究発表/ポスターセッション/シンポジウム/特別集会/懇親会
- ○シンポジウム

「環境影響評価に関する技術手法の最新動向(Ⅱ)(仮称)|

○特別集会

「環境関連データのオープンデータソースの動向と課題(仮題)」 「簡易アセスメントの可能性をさぐる(仮題) | 他

○一般講演/ポスターセッション

お問い合わせ 環境アセスメント学会事務局(office@jsia.net)

第5回JEASフォトコンテスト(2017年度JEASニュース表紙写真募集)のご案内

今年度もJEASニュースの表紙を飾る写真をコンテスト形式で募集します。テーマは これまで同様「日本の四季」です。未来に残したい日本の風景、行事など、季節感あふ れる作品の応募をお待ちしております。採用された方には、賞金等が授与されます。詳 細は、協会ホームページ(http://www.jeas.org/)にてご確認ください。

募集概要 ●テーマ:日本の四季 ●採用作品数:春夏秋冬各1点、計4点。

○応募資格: JEAS会員団体に属する個人

○募集期間:2016年7月1日(金)~2017年1月20日(金)必着

○写真規定:カラー写真(プリントの場合は六切程度、デジタルの場合はおおむね

500万画素以上)

○結果発表: 2017年4月1日、JEASニュース154号誌上、協会ホームページ

応募・お問い合わせ

(一社)日本環境アセスメント協会 JEASニュース表紙写真選考委員会宛

新規入会正会員の紹介

前田建設工業(株)

(2016年4月)

代表取締役社長 小原好一

〒102-8151

東京都千代田区富士見二丁目10番2号 電話(03)3265-5551

(担当)土木事業本部営業部 営業第2グループチーム長 森田浩二

編 集 後 記 2016年5月のJEAS総会において 理事に再任され引き続きJEASニュース編集委員長を務める こととなりました。微力ながらJEAS及びJEASニュースの発 展、会員の皆さまへのサービス向上に努めて参りますので、よ ろしくお願いします。さて、本号では梶谷会長、山本・和田両 副会長の他、新任役員のご挨拶を掲載しています。新しい顔 ぶれを迎えたJEAS、乞うご期待です。特集では日本で初めて 開かれた国際影響評価学会(IAIA16)についてインタビュー と現地取材でご紹介しています。アセスメントについての国 際情勢の一端が伝わりましたでしょうか。エッセイでは、本年で 5回目を迎えるJEASフォトコンテストに向けて、第1回から特 別委員を務めていただいている山岳写真家の村田先生に寄 稿をお願いしました。ライチョウのことや山岳星景のこと等、興 味深い話をご紹介いただきました。★ここ最近の話題から。熊 本地震における仮設住宅建設について。これはもう起こるも のだとして予め用意しておいてはどうかと痛感。5月末のオバ マ大統領の広島訪問。それ自体にまず感動。さらに「原爆投 下はアメリカの誤りではない。人類の誤りなのだ」という被爆 者代表の方の言葉に深く感動。人類も捨てたものではないな (JEASニュース編集委員長 長岡克郎)

